
ガノトスさんを狩りに行こう！

自殺肢体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガノトトスさんを狩りに行こう！

【Nコード】

N5376C

【作者名】

自殺肢体

【あらすじ】

天才的美少女ハンター、スイサイド・シェリルは初めてガノトトスを狩りに行くことにしたのだった。

1、基本的に一人

やはり、何をするにしろ、

「初めての体験」は、異様に緊張するものだ。

まして、それが生死を分かťほどの殺し合いだつたら、尚更のこと。

ガノトトスを狩りに行く事にした。

15で始めたハンター稼業、4年目にしてやっと、ガノトトスに挑戦してみようと思つたのだ。

……しかし、この類まれな才能と美貌を併せ持つ

「天才的美少女ハンター、スイサイド・シェリル」の私としては遅すぎる挑戦なのだが、これにはちゃんとワケがある。

まず第一に、愛用の武器のほぼすべてが

「片手剣」だという事。

ガノトトスというヤツは、普段は水中にいたので、デカイ音をだす音爆弾で怒らせて陸に上がせるとかしないと、ボウガンや弓でない限りダメージなんてまったく与えることが出来ない。そーゆーの、なんか滅茶苦茶めんどくさくて嫌なのよ……。

第二に、私は基本的にパーティを組むことなく一人で狩りをするので、対ガノトトス用の火属性片手剣

「バーンエッジ」と水耐性の強いザミの防具一式を揃えるのに結構時間が掛つてしまつたのだ。

そんなワケで、大体パーティプレイをする奴らから1、2年ほどは遅れをとっている。……まあ、1、2年の遅れで済んでいるところだ、天才ハンターたる所以なんだけどもね。

しかし、これはマジなんだけど、私にはいろんなハンター達からのお誘いが引く手あまたで、断るのにいつも苦労している。なぜ私が一人での狩りを好むのかと言うと、やはり飛竜ほどの大物は、一人で狩るのが醍醐味であると思っている。いや、実際そうなのだ。イャンクックに始まり、ゲリョス、フルフル、ダイミョウザミ、リオレウス、リオレイアと、すべて一人で狩ってきた。

これらの勇猛で雄々しく、時には可愛いらしくもある飛竜達を、私一人の力でねじ伏せてきたのだ。誰の力も借りることなく、私一人で！！それが、堪らなく快感なのだ。飛竜と一対一で対峙する時、私は性的興奮すら覚え、濡れもする。

そして、そんな私に付いた通り名が

「スイサイド（自殺）・シェリル」。

一人での飛竜狩りは、自殺行為とでも言いたいのだろうか？でも、正直ちょっと気に入ってるけど。

スイサイド・シェリル！！

2、油断大敵大天才

船に揺られてやって来ました、密林へ。

支給品ボックスを確認、素早く回収し、西の砂浜へ。

すると、いきなり居た。

海面から伸びるキレイな背ビレが、自らの存在を誇示しているかのように思える。

……さて、どうするかな。

まずはペイントボールでもぶち当てて……いや、その前にそこら辺をウロチョロしてるランポスどもを一掃した方がよさそうだ。

まあ、普段はランポスなんか雑魚にもならない存在なんだけど、飛竜と戦っている時に限っては、ヤツらのちよっかいが生死を別ける事になるほどの脅威となってしまうからねー。

普通に歩いて近づきつつ、バーンエッジを抜刀。すでに私の存在に気付いているランポス達は、唸り声を上げつつも慎重な様子。

「そりゃ、慎重にもなるよねえ。私のような天……」

不意に、後ろから大きく水の跳ねる音。

それに振り返ると同時に、凄まじい衝撃が頭部を襲い、ザザミヘルムが頭から弾き飛ばされた。

「くあっ!!」

為すすべもなく、私の体は後ろに倒れこむ。

確認するまでもない、今のはガノトスの水プレス！ 完全に私に狙いを付けていた！

その背ビレはせわしなく海面を動き回っている。

「ちよつと、ヤバイ……！！」

自分でも有り得ないと思うほど、油断してしまっていた。

……バカすぎる！ こんな、天才でもなんでもない！

チャンスとばかり襲いかかってくるランポス達を、尻餅を付いた状態でなんとかなぎ払い、ガクガク震える足を必死で立たせ、別工リアの洞窟に走り出す。

3、とりあえず落ち着け

(……情けない！ ホント情けない！ 殺し合いに来てるってのに、
なんであそこまで気が緩んでたの?!)

ガノトトスの奇襲に心を乱され息切れしつつ、ナナストレートを
揺らしながら手近な洞窟にどうにか駆け込んだ。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ！ ……ハア~~~~」
壁に背をもたれ掛けながら、その場に座りこむ。

「ちょっと、一服……」

と、取り出した自宅から持ってきたスタミナドリンクが、緊張の
あまりカラカラになった喉を潤す。

「ふう……、気持ちいい……」

ここは、外のジメジメとして暑い不快な環境と違って、ひんやりと涼しい。

傷付いたりオレイアの休眠場所でもあるこの洞窟、今はおとなしい
アプケロスが数匹いるくらいで危険はなく、心を落ち着けさせる
のにちょうどいい。

両手を見ていると、まだ少し震えている。

たぶん、水耐性の強いザミヘルムじゃなかったら、あの水ブレス
で頭を貫かれて即死だっただろう。……そんな死にざま、バカバ
カしい！ 死ぬなら、やっぱり古龍クラスと戦ってじゃないと！

しかしアイツの水ブレス、知識としては知っていたけど、じっさ

い喰らってみると、とんでもない威力！ プレスなんてものじゃない、ガンでしょ、アレ。超高圧のウォーターガン！

「……帰ろっかなあ……」

私のもつとも悪いクセが、考えるより先に口から出てきた。
今まで何回か、あった。

飛竜との戦いでちょっと絶望的な気分になると、クエストリタイアしてとっと帰ってしまいたい衝動に駆られる事が。

しかし、今まで一度だつてそんな事はしなかった。自らを天才と称する私が、ポケ村の連中に

「チキン美少女」と白い眼で見られるなんて、考えたくもない！

……大丈夫。

今日の狩りも、無事に済む……ハズ。

4、やりまくりの美少女（前書き）

訂正。3話のアプケロスは、アプトノスの間違いでした。アプケロスは結構、好戦的な子。

4、やりまくりの美少女

三分ほど休むと、ようやく私はのろのろと立ち上がった。

「んしょ…っと。さー、もー、さっさと狩って帰って酒宴！」

勢いって結構大事だ。さっきのは本気でヤバかったからスタコラ逃げちゃったけど、今はイけそうな気がする。

……自分で言った

「酒宴」って言葉のせいかな。お酒って、いいものだからね！ うん！ そうだ！

「さっさと狩って帰って酒宴！！」

これ、今日のスローガンに決まり！

なんかやる気が出てきたよ？！

「うふふ……、酒！ メシ！ 美少女！」

思わずよだれが垂れる。

洞窟から走って勢いよく出ると、ガノトスさんの背びれがのんびりと揺らいている。

「そーっ！ つれ！」

テンション高く、背びれに向かって音爆弾を投げつけると、「キーン！」という快音とともに、驚いたガノトスが海面から飛び上がった。

「……さあ、上がって来なさいよ！ このスイサイド・シェリルが遊んであげるんだから！！」

そう言った瞬間、30メートル近くある巨体が大ジャンプをして宙を舞い、私の上を通り過ぎていった。

海水がぽつぽつと、雨の降りはじめのように顔に降り注ぐ。

その光景に、一瞬見とれてしまった。

しかし私の足はもう、その巨体に向かって駆けていた。

「はあっ！！」

起き上がり、こちらに向きかけている顔面に対して、おもいつきりジャンプして落下の勢いのついたバーンエッジで叩き斬る。

「グアアッ！」

火属性の爆発の衝撃とともに、キレイな鮮血が飛び散った。

「もう一撃イ！」

苦しみにうめいているガノトトスを尻目に、反す刀で斬り上げる。即座に前転でふところに潜りこみ、足にむかつて斬りまくる。

「そおれっ！！ 一撃！ 二撃！ 三げきいっ！！」

なすすべもなく私にやられまくったガノトトスは、とうとうダウンしてしまった。

5、鉄山靠（前書き）

訂正。ガノトトスは、三十メートルもございませんでした。申し訳ない。何メートルかは知らん。

5、鉄山靠

「イケるっ！ 魚竜くん、このまま逝っちゃうかあ!？」

やはり私は天才だった。ただの一撃も喰らうことなく（不意討ちはノーカン）、狩れちゃうんだから！

地面を勢いよくのた打ち回っている憐れな魚竜は、無慈悲な刃に斬り刻まれることしかできないでいる。しかし。

「あっ?!」

剣を握る手には、快感とも言えた斬撃感はなくなり、岩肌にも斬りつけてるような、重く、不快な感触が支配し始めている！

「チィッ!」

バーンエッジの切れ味はあまり良くない、ということは忘れていたワケじゃない。ただ、私はちよつとタマに大幅なドジをかますことがある、というだけのこと！

慌てる必要はない。即、その場で剣を研ぎ始めた。

・

「ああ、もう!」

ガノトトスはすでに起き上がる体勢、しかし私も研ぎ終わる寸前その時。地中から二つの鋭い爪が、しゃがんでいる私の顔めがけて襲いかかってきた。反応よく、私はすぐさま後ろに顔を退く

が、相当ビビらされたせいで、尻餅をついた状態に。

……ヤオザミッ！ このタイミングで！？

そして、無防備な私の眼前には、ぬらぬらした表面の、鱗が一枚いちまい確認できるほどの魚竜の巨体が迫って

「うあっ！！」

宙を舞っている。

相当な質量のある魚竜の横っ腹からの体当たりは、160cm程度の私の体など、簡単に十メートルは弾き飛ばした。地面に背中から激突、めちゃくちゃに後ろに転がっていく。

「カツ……ハアッ！！」

血を吐くが、大した量ではない。しかし、息ができない。でも、苦しんでるヒマなんかない！

距離の開いた相手に対するガノトトスの攻撃は、水プレスしかない。ヤツはもう、美少女である私を貫く快感に震えながら、発射体勢はいつているだろう。数秒後には、確実な死が待っている！

呼吸なんぞ後でいくらでもすればいい！

からだ！

私の体！

死にたくなければ動け！

動け！！

動
け
つ
！
！

6、生ぐさい(前書き)

これで終わりです。時間を空けすぎて申し訳ない。

6、生ぐさい

チッ！

瞬間、プレスは頬をかすめて通り抜けていった。私を貫けなかったことに、舌打ちしたかのような音を走らせながら。

生きた！

横転がギリギリ間に合った！

どうする！？

次はどう来る！？

……え？

愚かにもガノトスは、またも水プレスの発射体勢に入っていた。
……アイツ、相当あせっていると見える！
バカな子……！

プレス後の数秒間という回復の時間を与えられた私にとって、発射までの二、三秒は、反撃体勢を整えるのに充分すぎるほどのプレセントタイムッ！

一秒、息を吸い、

一秒、息を吐く。

体内にて圧縮された水を、体全体を使い、吐き出す動きに合わせ

て繰り出されるガノトトス必殺の超高压ウォーターガン。

もうすでに落ち着きを取り戻していた私は、難なくそれを斜め前転でかわす。

あ。来た。

私、もう、勝てるな。百パーセント間違いなく。

根拠はない。

でも、確信がある。

今までも、そうだった。

この確信が芽生えて数分後には、獲物達は例外なく私の足下にその骸を晒していたのだ。

天才の確信なんだからもう、間違いはない！

「ハアアアアッ！！」

バーンエッジを強く握りしめ、ときのを発しながら魚竜に向かって駆けて行く。

約九分後。

「ふいー……結構しぶとかったなあ、コイツ」

ガノトトスの死骸の横に座りこんで、思わず洩らす。

「ああ、もう、疲れた！ 剥ぎ取りするのもめんどくさい！ あとはギルドの人に任せよう……」

なんかコイツ、苦手だ。今までで一番、疲労が激しい。正直もう、闘いたくない……。

「この天才的美少女ハンター、スイサイド・シェリルをここまでてこずらせるなんてね。……まあ、良い経験になったよ。ありがとう」

と、横たわるガノトスの顔にキスをしようと口を近付ける……が。

「生ぐさい……」

海の生き物なんだし、そりゃそうだ。おまけにぬるぬるしてるし。

帰りの船に揺られながら、呟く。

「とりあえず帰ったら……酒飲んで、美味しいもの食べて……お風呂入って……寝て……」

私は今、かなり疲れているハズなんだけど……。

「……で、次はどのコとやろうかなあ……」

なんてセリフが出てしまう。

自ら

「死」という危険に飛込んでおきながら、
「生」を勝ち取り、安息を得る。

……でもまた、あの 勇猛なワイバーン達と闘いたくなる。彼
との生死のやりとりが愛おしくすら思えてくる。

質の悪い病気に架ってるようなものだ、モンスターハンターとい
う奴らは。

死ぬまで治らない病気。

いいけどね、別にいつ死んでも。平穩無事に暮らすより、遙かに
刺激的で楽しいんだし。

「来週あたりからまた頑張ろ〜と……」

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5376c/>

ガノトスさんを狩りに行こう！

2010年10月10日00時43分発行